

## 書評

一近代的分節の無効化、社会化空間の磁場構造の変容、認識や感覚地理の変質、コミュニケーション形態の変容など——という〈大きな問題意識〉を、教育社会学は「学問」としてどのように引き受けていけばよいのだろうか。高速で走る電車のなかで飛び上がっても、前と同じ場所に着地する、といった社会的文脈を力

## ■書評■

鍾清漢著

『儒家思想と教育—教育の歴史と哲学と思想と—』

ッコに入れた教育理解を破棄する立場にしか、教育社会学は立てないのは確かなのが……。『子ども・学校・社会』という書名が、まさにそうした苦渋を物語っているように思われる。

◆四六判 248頁, 1,648円  
東京大学出版会

麗澤大学 細川幹夫

本学会誌で鍾清漢教授の近著『儒家思想と教育』が書評されることになって、その役目がどういうわけか回ってきた。筆者は儒家思想の研究者ではないが、勤務校の創立者が『東洋法制史』の確立者であり、その学統をうけつぐ同僚がいること、さらに鍾教授とは知己の間柄であるので書評を引き受けざるを得なかつた。本書は、孔健氏が序で述べているように、専門家にも教育者にも必読書となるであろうし、一般読者にも啓蒙書となるであろう。儒家思想の専門書としての評価について同僚に助言を求めたところ、荀子の項などは専門的にみてすぐれた論文であり、共感するところが多くほとんどの異論はないという。そのような評価を基礎にして筆者は教育者として、また啓蒙書としての本書についてささやかな評論を試みてみたいと思う。

本書の構成は序説にはじまり、つづいて孔子、孟子、荀子の教育思想と時代背

景、最後に《礼記》にみる教育の思想が取り上げられている。第1章から第4章までは序説の論述と違って、孔子・孟子・荀子・礼記の思想内容の歴史的評価と論争点が丹念に、しかも客観的に整理検討されており、儒家思想の素人にも大変わかりやすい。問題点があるとすれば、ところどころで著者が現代日本教育の現状を憂うるコメントをしているが、その論理的脈絡がいま一つ理解しにくい点である。だが、この簡単なコメントが著者の意図を知る上では重要なとなるので、ここではその意図を示した序説の内容を要約してみたい。

序説はかなり長い。まず、本書の目的は中国の教育史を解明することにある。著者によれば、どの国の教育史をみても、教育史というものは実際には人文主義的なわちヒューマニズム教育思想の変遷・沿革を記載したものに他ならないし、中国の人文主義教育思想の起りは紀元

前三千年ごろの夏・商・周の三代にさかのぼることができるとする。つづいて、ヒューマニズムについて西洋教育史との比較をはじめ、西洋のルネッサンス時代に言及して歴史の大転換期には古典研究から新しい再生が行われることを強調する。そして、ヒューマニズム教育思想の主たる興味の対象は人事におけるリベラルな教育であり、決して超自然的な思想と行動の体系（いわゆる宗教的な思想・行動体系）ではないこと、そういう意味では儒教も決して宗教ではないという。

以後、中国とインド、中国とヨーロッパ、中国と日本との比較思想史の研究に入り、中国古代の人文主義思想、古代ギリシャ・ローマの現世的な人文主義思想、孔子の仁の思想、ヨーロッパ中世の宗教思想、インド仏教が中国に移入したころの中国思想、中国のルネッサンスにあたる宋儒理学の思想、禪宗の思想などの歴史的展開に触れたのち、西洋のルネッサンス期に出現した偉大な人文主義の思想家ミルトン、モンテニュ、ロック、ベーコン、ルソーなどに言及して、彼らの思想的特質が孔子、孟子、荀子、朱子などの儒家思想と共通している点を強調する。さらにソクラテス、アリストテレス、プラトンとの共通点についても言及したのちに現代教育史の流れに触れ、中国の近代教育思想に影響を及ぼしたカント、ヘルバルト、ナトルプ、デューイ、あるいは日本の教育哲学の影響についても言及し、東西思想の出会いと和合の道程に触れている。

鍾教授によれば、中国にはさまざまな思想的伝統があり、なかでも道・儒・墨

の三家が最も影響力があったが、中国の教育思想は大体儒家の思想をその源にしているという。最後に、著者の得意な教育と経済の領域に触れ、儒教文化圏に入るアジア諸国の経済的発展の原因を究明していくと、マックス・ウェーバー理論の妥当性がきわめて疑わしくなるという。この項目は多くの教育社会学者の興味をひく点であろう。

この序説をはじめて読むと、人によっては中華思想か博覧強記の印象を受けるかもしれない。その内容の詳細な学問的検討には多くの時間を要するのであるが、細部にとらわれずにこれを啓蒙書としても一度読み返してみると、その意図と理論仮説は比較的分かりやすく、非常に興味深いアプローチであると思う。

最後に、道徳教育という観点から筆者の評論なり感想なりを付け加えてみたい。まず第1に、孔子の思想は中国の天下騷乱の時代、封建時代に社会秩序を正すための政治道徳として成立し機能してきており、その思想の核心は「修身齊家治国平天下」にあるといってよかろう。君子といわれる天下のエリートたちが古聖人の道徳モデルにしたがって、まず自分の身を修め家を齊えて、その人格の感化力を基礎にして国を治め、ひいては中国全体に平和をもたらすべきだとの王道思想を展開する。このような人格主義的政治道徳に反対する人々はおそらく少ないのでなかろうか。現代のわが国の指導者たちにも求められる理想であろう。だが、このような理想もなかなか実現されないこと、ひいては為政者にその道徳が単に人心支配の道具として利用される

## 書評

ところに問題がある。つい最近、道徳教育の強化を叫ぶ当局の元高官が汚職で追及され、その責任を妻に転嫁したことは記憶に新しい。

第2に、儒家思想は上下・本末・大小を明確にし、親や師、君主や長上に対しては「頭上に物を戴き、敬い謹む」という謙讓・謙遜の態度、敬語を発達させて相手を深く尊敬するという礼儀を育ててきた。だが半面で卑属・小人・目下・婦女子などに対しては蔑視に近い考え方を育て、たとえば小人（民）に対しては「由らしむべし、知らしむべからず」というような民衆の政治参加を否定する非民主的な考え方を育ててきたのも事実である。したがって、敗戦直後の昭和23年6月19日に儒教道徳を骨格にした「教育ニ関スル勅語」が衆議院において「教育勅語等排除に関する決議」、「教育勅語等の失効確認に関する決議」が行われ、戦後教育は日本国憲法、教育基本法などの基本法の精神にしたがって民主主義的な政治と道徳の在り方が探求されるようになった。学校教育では漢字を制限し当用漢字が使われるようになった。また、昭和33年に道徳の時間が特設されたとき、その教育内容は戦前の「聖人君子の修身教育ではない」といわれてきた。

戦後の民主主義社会においては、人間一人ひとりが自律的に善さを求めて人間的成長を達成すべきであり、その個性の発現を重視し援助することが教育の役割になってきている。国連決議の「世界人権宣言」（1948年12月10日）やユネスコ

の「学習権宣言」（1985年3月29日）、あるいは近くわが国でも批准される予定の「児童の権利に関する条約」（1989年11月20日）などの人権思想の普及過程をみてみると、君子やエリートによる権威主義ないしは専制的な上からの教育体制は変質せざるをえないであろう。

第3に、戦後の民主的な道徳教育も十分に行われているとはいえない。そこに君子の道徳教育をもう一度復活させる動きがみられる。教育勅語の時代に基礎教育をうけた世代には儒家思想はなつかしく受け入れられやすい。だが、そのような人々がいま教育界の第一線から引退しつつある。戦後の当用漢字で民主主義教育をうけた世代にそれがどのような形で受け入れられるであろうか。いまアメリカの道徳教育においても、旧来の品性教育（character education）や価値明確化（values clarification）の立場が見直される動きがあるようだ。そのような動向も十分に考え合わせ、また人々の国際交流が激化し多文化教育が進行するわが国で儒家思想がどのような形で役立つか。単なる輪廻思想・反動思想ではない、ある明確な歴史観に立つ儒家思想の展開が試みられるならば、余人をもって代えがたい鍾教授の業績は顕著なものとなるであろう。そのような萌芽は十分に感じられる著作である。今後の探求に期待したい。

◆ A5判 325頁、3,500円  
成文堂